

8. 菌核病による露地栽培ウドの被害の特徴

新潟県森林研究所 松本則行

ウドの病気として古くから知られているウド菌核病については、軟化栽培で発生したもの報告はあるが、露地栽培での被害の詳細は報告されていない。そこで、2008年6月露地栽培をしているウドに菌核病が発生したので、被害の特徴について報告する。

なお、ウド菌核病の病原菌は、*Sclerotinia sclerotiorum* (LIB.) DEBARY と報告されているが、今回の病原菌については、*Sclerotinia* 属の菌であることは判明したものの、種の同定には至っていない。

調査地は、新潟県森林研究所構内のウド畑である。2008年6月に1回目の調査を実施した。調査項目は、菌核病に罹病している株の系統名、1株当たりの罹病茎数、同健全茎数、罹病部位の高さ、罹病部位の茎の直径、罹病部位が葉の付け根かどうか、菌核の有無等とした。その後、2回目の調査として、8月に、1回目の調査以降に褐変の現れたものについて、1回目と同様の調査を行った。

2回目までの調査結果は、全324株のうち、罹病していると観察されたものは33株、茎数は55本であった。全69系統のうち罹病していたのは、10系統であった。そのうち、多く植栽された4系統で見ると、4系統中3系統で罹病しており、最も罹病していたのは長岡3号で、罹病割合は40%、次いで上越5号20%、新潟9号1%であった(表1)。上越1号は73株あったにもかかわらず、罹病株は無く、耐病性に系統差が認められた。

罹病した33株のうち、1株から発生していた茎全てに褐変の見られたものは、4株(12%)で、29株は褐変のない茎も発生していた。また、罹病した33株のうち、新たに地面から新芽の出た株が9株(27%)、罹病部位より下位にある葉の付け根から脇芽の出ている株が2株(6%)あったことなどから、それほど伝染力の強い病菌ではないと思われた。

菌核病は、地際部が腐敗する場合もあるとされているが、本調査では褐変の始まったと思われる部位は、地際からのものは無く、ほとんどは葉の付け根部分から始まっており、そこから折れて倒伏する場合が多く見られた。

病徴が最初に見られたのは6月下旬であったが、6月中旬の気温は低く、過去7年で最低であった(図1)。キャベツなど野菜の菌核病では、温度18~20℃が成育適温とされており、2008年の当所では6月上旬が、その適温になっていたことが分かった。

表1 ウド系統別の菌核病罹病割合

系統名	全株数 (株)	罹病株 数(株)	罹病割 合(%)	菌核有の 株数(株)
新潟9号	92	1	1	0
長岡3号	50	20	40	15
上越1号	73	0	0	0
上越5号	25	5	20	1

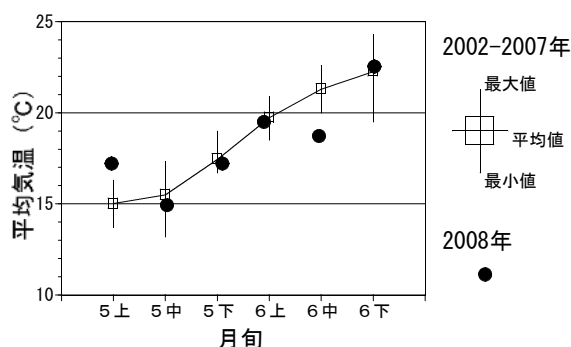


図1 5月および6月の気温(2002-2008年)